

小集団討論場面における話者交替の日中対照研究

賈

琦*

キーワード：小集団討論，話者交替，ターン，フロー，割り込み発話

要 旨

本研究は、日本語母語話者と中国語母語話者の小集団討論における話者交替について考察したものである。まず、先行研究で見られたターンの定義と実際の考察内容の不一致という問題を解決し、日本語と中国語における話者交替の実態を反映できる話者交替システムを提示した。そして、その分類に従い、量的および質的分析を通して、日中両言語における会話の共通点と相違点を見出し、それを生み出す要因を分析した。

分析の結果、新しい話者交替システムについて、まず、次の話し手を誰が選択するかにより、自己選択と他者選択に分けた。また、自己選択の中に、ターンを始める時点によって TRP（話者交替適確箇所）である場合と TRP でない場合に分類した。更に、TRP である場合では、一人発話と同時発話を取り上げた。そして、TRP でない、即ち、割り込みが生じた場合、参加者の発話の展開により、「ターン奪取」「ターン取得失敗」「ターン並列」と「ターン挿入」の4つに分けた。「ターン並列」は本研究で新しく提示しているものであり、中国語データにしか見当たらなかった。「ターン並列」も「ターン取得失敗」も日本語データより高いため、中国語母語話者の方は割り込まれても、簡単には発話権を譲らず、他人の話し手としての話す権利より自分の方の権利を重んじると考えられる。日本語母語話者の方は、話し手の発話の関連する短い発話を挿入する「ターン挿入」を多用することにより、協力的な姿勢が示されている。また、他者選択の言語形式から見れば、中国語母語話者の方は参加者の発話内容に焦点を当てる「内容重視型」であるのに対して、日本語母語話者は参加者全員の意見を表明する発話を確保しようとしているように見えるため、「人間関係重視型」と推測できる。

1. はじめに

中国語と日本語の日常会話や話し合いはそれぞれの母語話者にとっては何ら不自然なところはなく進められているが、お互いを観察すると違和感を感じることがあるようである。たとえば、日本語話者は中国語の会話を聞いて言い争っているみたいだと誤解することがある。中国語話者にとっては日本語の会話はおとなしすぎると感じられることがある。これはそもそも、中国語と

*JIA Qi：九州大学大学院比較社会文化学府国際社会文化専攻博士後期課程

日本語の話者交替の仕方が異なっているためではないと思われる。

会話分析の提唱者である Sacks 達は話者交替の構成に従って、話者交替の最も基本的な体系を提示し (Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974), 今日まで話者交替に関する研究の基礎となっている。参加者が二人の対話においては、話者が交替する可能性は一人しかないが、多人数の会話においては可能性が増加するため話者交替の体系は複雑になると思われる。本研究では参加人数が4名である小集団討論という場面を設定する。「小集団討論」とは「数人の参加者が一つのグループとして、与えられたトピックについて、自由に自分の意見を述べたり、情報を提供したりし、他の参加者との意見交換を目的とする会話」と定義する。日本語話者と中国語話者による小集団討論を比較対照し、日中両言語のデータに見られる話者交替の実態をカバーできる話者交替システムを提示し、両言語における話者交替の共通点と相違点を明らかにする。

2. 先行研究

Sacks et al. (1974) は、「話者交替適確箇所 (TRP)」という概念を提出し「ターンが移行する可能性のある箇所のこと」と述べている。この概念を使用し、以下のように「話者交替 (turn-taking) のルール」を提示している。

[ルール 1] すべての交替の最初の TRP で適用する。

(a) 現在の話し手が、次の話し手を指名した場合、現在の話し手は話すのを止め、次の話し手が次に話すことになる。

(b) 現在の話し手が次の話し手を指名しない場合、最初に話した人が発言権を得る。

(c) (a) ないし (b) がない場合、現在の話し手が必ずではないが、話し続ける。

[ルール 2] 2 番目以降の TRP で適用する。

現在の話し手によって、[ルール 1] (c) が適用された場合、次の TRP で [ルール 1] (a) (b) (c) が適用される。このようにして、話し手が交替するまで繰り返される。

Sacks et al. (1974) では、その話者交替システムを記述する際に、「ルール」(1974: 704) という用語を使用したことによって、すべての会話はその話者交替システムのルールに則らないと違反であると誤解されかねない。Button (1990) によると、規則には、人の頭の中にある規範としての規則と、実際の会話に現れる法則としての規則がある。Sacks et al. (1974) の提唱する会話規則の「ルール」という用語は後者の意味である。即ち、規則に従って話者交替などが行われているのではなく、話者交替を観察すると一定の規則が見られるのである。参加者の実際の行動に組み込まれている志向、態度が見られるということである。金 (2000: 85) は「Sacks ら (同上) では、「一度で一人が話す (one-speaker-at-a-time)」という原則を基に同時発話のない「turn 取得」のみを自己選択とし、同時発話を誘発する「turn 奪取」はルール違反とされる」と解釈して

いるが、それに対して、森（2004）は、Sacks et al.(1974) が示しているのは話者交替の最も基本的な「原則であって、それから逸脱するケースもあり、その逸脱したケースについても原則と照らし合わせて参加者が何らかの判断をし、その判断が行動に反映されているとみなすのがCAの立場である」と指摘している。

また、Sacks et al.(1974) は主に TRP である場合を巡って考察され、TRP でない場合については殆ど論じていない。金（2000）は TRP でない場合で生じる「turn 奪取」を取り上げている。劉（2004）は他者選択の場合、もし選ばれた参加者が発話をしなければ、今までの話し手あるいは他の参加者が次の話し手になれると述べ、Sacks et al.(1974) のシステムを修正しているが、TRP でない場合には触れていない。本研究では TRP でない場合も考慮にいれ、その場合において参加者がどのように話者交替を行うのかを考察することによって、参加者の言語行動に潜んでいる志向、態度が見出せれば有意義な研究成果になると思われる。

更に、Sacks et al.(1974) は「ターン」を「一人の話し手が始めてから他者が発話権利を受け継ぐまでの全ての発話である。」と物理的な定義を提示している。そもそもターンの概念が明確に示されず、それについて異なった解釈がされ、日本語会話と中国語会話の研究においても、用語やターン及び話者交替の捉え方は研究者間で異なっている。例えば、その「話者」が誰のことを指しているのかは一致していない。日本語に関する話者交替の先行研究として、小室(1995)、初鹿野(1998)、李(1999)、金(2000)及び木暮(2002a)等がある。小室(1995)、初鹿野(1998)、李(1999)、金(2000)はSacks et al.(1974)に従い、ターンを一人の話し手、あるいは会話参加者が話し始めてから、他の参加者の音声言語連続やポーズによって区切られたものとしている。その定義に従うと、相づち的発話等もターンと捉えるべきであるが、いずれの研究でもそれをターンとはしていない。小室(1995)は「あいづち」、「短い感想やコメント」と話し手の発話を「パラフレーズ」したものをターンとは認めない。初鹿野(1998)も「あいづち」をターンとはしていない。李(1999)は「発話順番の交替表示」として、「フィードバックの使用」も取り上げている。聞き手の「あいづちもフィードバックの一種である」と認めているが、研究対象とはしていない。金(2000, 2001)は「実質的な内容」を持つ「主流 turn 間の交替を turn-taking とし」、「相づち、同時開始」など「非主流 turn」と分類された発話によって話者交替が起こったとは認めない。従って、定義と実際の研究対象に格差が生じ、矛盾のようにも見られる。従って、ターンの定義について再考する必要がある。木暮(2002a, 2002b)では「話者交替の「話者」とは、どのような言語行動を行う者であるかについて再考」し、「会話における役割に応じて、「ターン」を「話し手のターン」と「聞き手のターン」とに区分した。」と述べている。しかし、聞き手の発話である「あいづち」はターンとせず、ターンの定義から除外し、特別に扱っているようである。

諸研究から分かるように、従来の話者交替に関する研究は、主に Sacks et al.(1974) を基にし

てなされてきた。しかし、ターンの定義と実際の研究対象が一致しておらず、聞き手の言語行動である「相づち的発話」等をどのように捉えるのかが問題になる。それは物理的な捉え方で定義された「ターン」と役割関係から規定される「話し手による発話」と「聞き手による発話」の考え方が混在し、整理されていないからであると考えられる。また、参加者が3名以上の小集団討論における話者交替の日中対照研究に関するものはまだ存在しないようである。従って、本研究では、まず話者交替についての概念を整理した上、日中両言語における小集団討論の話者交替の実態を対照しながら把握する。

3. 研究課題

本研究では、具体的には、下記の問題に焦点を当てる。

- 1) 第4節では、まず、調査方法を紹介し、第2節で取り上げた先行研究の諸問題点を解決するため、小集団討論資料における話者交替及びそれに関連する概念を検討する。
- 2) 第5節では、Sacks et al.(1974)の話者交替システムの最も基本的な体系を基にし、日中両言語の小集団討論の実態をカバーできる話者交替システムを提示する。
- 3) 2)で提示した話者交替システムに基づき、第6節で日中小集団討論場面における話者交替について対照研究を行う。日中両言語の話者交替の共通点と相違点を明らかにし、更に、それを生み出す要因を探る。

4. 研究方法

4.1. 調査方法

本研究で用いる小集団討論の資料は、協力者の許可を得た上で、日本語母語話者同士の間で行った討論の10組と中国語母語話者同士の間での10組を録音して文字化したものである。各組の参加者は男女2名ずつ、計4名のお互いに知り合いの大学生あるいは大学院生であり、会話には録音によるぎこちなさなどは見られなかった。参加者に「いい授業はどういう授業か」というトピックを与えて約10分間、自由に討論してもらった。日本語の調査は日本の信州大学と県立広島大学で実施し、中国語の調査は中国西安交通大学で実施した。

録音終了後、すべての録音テープを文字化し、その後、参加者に協力してもらい、録音テープと文字化した原稿との照合を行った。以下は本研究における会話例の表記方法である。

[] [] 中の発話は同時に発される発話部分を示す。

(0.3) () 中の数字は10分の1秒単位で示され、沈黙の長さを示す。(0.3)は、0.3秒の沈黙を示す。

- 「—」の前の音節が長く延ばされていることを示す。「—」の数が多いほど長く発せられたことを示す。
- ？ 疑問符ではなく、上昇のイントネーションを示す。
- ・ 下降のイントネーションで文が終了することを示す。
- ， ごく短い沈黙，あるいはさらに文が続く可能性がある場合の「名詞句，副詞，従属節」などの後ろに記す。
- ！ 最初のモーラが高く始まり，その後少し下がるが，下降のイントネーションほどは下がらないものを示す。
- { } { } 中の記述は非言語的な行動を示す。
- * 聞き取れなかった発話部分を示す。
- 注目すべき箇所を示す。
- ページ左端から右端への棒線は時間軸を示す。1本の棒線上の発話は時間にそって発せられたものである。ページ右端を越えて続く発話は改行して次の横棒にそって表示する。

会話例の最後の (J1), (C7) などはデータの番号 J は日本語討論, C は中国語討論データを示す。中国語データは直後に日本語訳を付す。

4-2. 研究単位

木暮 (2002b) が述べているように、「話者の交替と会話における役割の交替は必ずしも一致するわけではない」。今までの研究において、物理的な捉え方で定義された「ターン」と役割関係から見た「話し手」と「聞き手」の考え方が整理されていないことを踏まえ、まず、役割関係から「話し手」と「聞き手」を区別し、それに基づいて、話者交替及びそれに関連する概念を整理しなおす。

4-2-1. 参加者の役割関係——話し手と聞き手の認定

会話参加者の話し手と聞き手の特定は容易なことではない。それはただ音声を発している参加者が話し手であり、ただ黙って人の発話を聞いている参加者は聞き手であるというわけではないからである。参加者の役割を明白にするために、一つ一つの発話において各参加者がどのような役割を担うのかを分析しなければならない。本研究では、発話、話し手と聞き手の定義、及び話し手と聞き手の発話の特徴を以下のように捉えることにする。

発話：杉戸 (1987) に基づき、一人の参加者のひとまとまりの音声言語連続で、他の参加者の音声言語連続やポーズによって区切られるものと定義する。

話し手：

floor（会話中の「心理的または空間内に認識される（トピック・機能・その両方）今進行していること」（Edelsky, 1981））を得る内容を話すという行動を取る会話参加者。

話し手の発話：

木暮（2002a）に基づき、何らかの実質的な内容を表し、新しい情報を提供したり、話を展開させたりする発話とする。

聞き手：

相手の発話を聞く作業を中心として、floorを得る内容でない発話する会話参加者。

聞き手の発話：

本研究では、杉戸（1987）を参照し、実質的な内容を積極的に表現する言語形式を含まず、また判断・要求・質問など相手に積極的な働きかけもしないような発話を聞き手の発話とする。具体的には以下のような発話を取り上げられる。

① 相づち的発話

堀口（1997）の定義によると、相づちとは、話し手が発話権を行使している間に聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現である。例えば、「あー」「はー」「うん」「そうですね」「そうですね」及びその組み合わせなど、応答詞を中心とする発話である。

② 感情を表す発話

「ええ!」「まあ」「ほう」などの間投詞及び「いいですね」「すごい」などのような短いコメントが含まれる。

③ 繰り返し発話

聞き手が話し手の発話を聞きながら、相手の直前の発話の一部または全部を繰り返す発話。また、相手の発話の一部を繰り返してそれに「ですね」「だろう」を付けることがある。これは堀口（1997）によると、「モダリティー形式の繰り返し」と称されるものである。

④ 言い換え発話

話し手の発話の内容を聞き手が自分の言葉で改めて表出する発話である。聞き手が用いる言葉は話し手が使用したのとは異なるが、その内容は同じである。即ち、他の表現で内容を繰り返すわけである。

以上から分かるように、聞き手の発話は、比較的短い発話で、話の内容の展開に寄与するようなものではない。

4-2-2. 話者交替における概念

発話権：

話し手として話をする権利。即ち、発話権は話し手の役割を果たす側のみにある。

ターン：

Sacks et al.(1974)によると、ターンは一人の話し手が話し始めてから他者が発話権を受け継ぐまでの全ての発話である。本研究では、ターンを一人の話し手が話し始めてから次の発話権を持つ話し手の発話で区切られ、話すことをやめるまでのすべての発話とする。即ち、現在のターンは後続する話し手の発話によって決められるわけである。その話し手を、先に述べたように、話し手の役割をする参加者とする。

話者交替：

本研究では、「話者」を「話し手」とし、話者交替を話し手、即ち、発話権を持つ参加者が交替することと定義する。次の例(1)で言えば、話し手の女2と男2の交替することを指す。

(1)

女2：やっぱ、いい授業ってのは、こう何ていうか、似てるけど、やっぱり、その生徒が参加で

女2：きるっていうのもあるし、やっぱり、意見言えない子もいるから、そういう子をどう先生

女2：が言えるような環境を作って、そういうふうな感じの授業じゃない？

男1：

うん、なるほどね。

男2：俺さ、いやまじめな話なんだけど、(略)

(J2)

発話とターンの関係：

一つのターンは、一つ以上の発話から構成されている。さらに、一つのターンには一人の参加者の発話からなるとは限らない。今の話し手の発話に対して相づちを打ったり、その発話を理解するため、何らかの関連ある聞き手の発話もそのターンに属する。

例えば、上の(1)では、三つの発話が観察される。まず女2は話し手として floor を得て自分の意見を述べている。floor を得ない聞き手の役割を担う男1の発話は独自のターンを形成しない発話（相づち的発話）である。続いて男2は floor を得て新しい話し手となり、話し始める。これによって、女2の発話とそれに対する男1の発話が一つのターンとなる。

TRP：

Sacks et al.(1974)に従い、話者交替が問題なく行われる可能性がある発話の切れ目、即ち、発話権を持つ話し手が話し終わると予測される箇所を「話者交替適確箇所（Transition Relevance Place）」という。

以上のような規定により、本研究では、話者交替の「話者」を役割関係からの「話し手」と一致させ、先行研究に見られる「ターン」と「聞き手による発話」のずれを解決することができる

と言えよう。

5. 小集団討論における話者交替システム

本研究では、Sacks et al.(1974) と金 (2000) を参考にし、TRP である場合と TRP でない場合を両方考察し、日本語・中国語における話者交替の実態がカバーできる話者交替システムを以下の図 1 のようにまとめる。

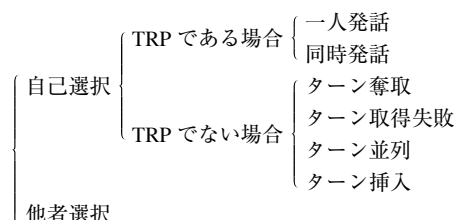


図 1 小集団討論における話者交替システム

図 1 で示すように、次の話し手の選択者により、自己選択と他者選択に分けられる。

自己選択とは、参加者が、自らターンを得ようとするものである。話者交替に成功することもあるが、失敗に終わることもある。

次は、自己選択の下位分類について説明する。上述の TRP の概念を用い、「TRP である場合」と「TRP でない場合」に大別される。TRP である場合において、今までの話し手のターンが終了したと思われる時点で、次の話し手がターンを取り、話し始める。さらに、次の話し手が一人か二人あるいは二人以上かによって、「一人発話」と「同時発話」に分ける。「TRP でない場合」というのは、今の話し手のターンがまだ終わっていないうちに、他の参加者が話し手の発話に割り込んで、新しい話し手になったつもりで話す場合である。この割り込み発話を話者交替の実態により、更に「ターン奪取」、「ターン取得失敗」、「ターン並列」と「ターン挿入」に分ける。

それに対して、他者選択というのは、Sacks et al.(1974) のように、現在の話し手自身が次の話し手を選択したならば、その選択された者は、次にターンを取る権利があり、かつその義務を負う。そしてターンは移行し、話者が交替する。

以下、実例を通してそれぞれの下位分類を説明する。

5.1. TRP である場合

5.1.1. 一人発話

一人発話とは、TRP で次の話し手が自らターンを取り、話し始める場合である。

男1： それもあるし。やっぱ、ほら、試験が関係してくるじゃん、中学校高校

男1： になると、覚えることがいっぱいありすぎて、ディスカッションする時間もてないという

男1： か、

(2)では、男2が授業で意見を言うことが恥ずかしいので、いやだと言っている。そして、男1は今まで話し手であった男2のターンが終了した時点で、次のターンを順調に取り、話し手として自分の経験から言い始める。

(3)

$$(1.5)$$

女2：想吧。

(1.5)

女2：いろいろ考えたよね。

上のように、討論の最初のところで、男2は「始めようか」と勧めている。その発話を受け取り、参加者の女1は「はい」と同意を表している。その後1.5秒の沈黙があることから、今の発話権はどの参加者にあるのかは不明であることが分かる。こういう状況は、Sacks et al.(1974)の「現在の話し手が次の話し手を指名しない場合」と同じであり、誰であっても最初に沈黙を

破って、話し始める人が話し手になり、発話権を取得できると考えられる。ところが、その次は、一人の参加者ではなく、二人の参加者が同時に話し始め、同時発話が見られる。もしその同時発話が続けば、討論が混乱に陥る恐れがある。実際には、女1が先に話すのを止め、話し続ける人、つまり女2が話し手になり、発話権の取得に成功したと考えられる。言うまでもなく、同時発話が出現するにあたり、二人ともそれに気づき、同時に話すのをやめる可能性もある。その場合、再び沈黙が生じ、話し手の再選択が行われる状況（TRP）になり、次の話し手が出現すると考えられる。

ターンの定義によると、途中で止める話し手の発話も一つのターンとなるので、分析を行う際、ターンの数は同時発話に参加した話し手の人数で決まる。よって、(3)ではターン数は3とする。

(4)

男1：ここ言い忘れたって、ちょっと待って、考え中です。

女1：待ち遠しいって。

男1：[その授業が*ああ.]

男2：[その授業が*ああ.] [笑う]

(J5)

(4)では、男1は何を言おうとしているのかは分からないようで、考えを整理していると思われる。そこで、参加者の女1が「待ち遠しいって」を言って、男1を催促している。こういう場合に、参加者のみんなに待たせるのは悪いと思っている男1が一人発話で話し始めると、発話権は順調に男1に回ってくると考えられる。もしくは、男1の代わりに、男2が先に話せば、今度は男2が次の話し手になるはずである。ところが、その次に一人発話ではなくて、男1と男2の同時発話を観察されている。その後、二人とも同時発話に気づき、また発話権を放棄している。参加者のみんなの笑いによって話者交替システムはまた新しい話者の選択に戻ったことが分かる。

5.2. TRP でない場合

TRP でない場合とは、現在の話し手の発話が終わると予測されない場合に、他の参加者がその発話に割り込んで話し手として話し始めることである。本研究では、このような発話を割り込み発話と呼び、二人の話し手が発するもので、一人の発話が完結しないうちに、あるいは話し終わるとは予測できない時点で、もう一人の発話が開始されているものであると定義する。

5.2.1. ターン奪取

TRP ではない場合における自己選択を現在の話し手以外の参加者が割り込んだ後のターンの

展開の結果により、「ターン奪取」、「ターン取得失敗」、「ターン並列」と「ターン挿入」に分ける。

「ターン奪取」とは、現在の話し手のターンが終わっていないうちに、他の参加者が自分の発話を優先させようとし、割り込んで話すことである。その結果、割り込まれた現在の話し手が発話を止め、割り込んだ方は発話権を取って喋り続けるということになる。これは以下のように図示できる。「|」はターンが終了することを表す。

話し手 A: _____

話し手 B: _____ |

(5)

女2: 講義的なものって先生達が,

男2: _____ 先生によるけどね, _____ ほんとに何もしない先生とかさ,

男1: _____ うん.

男2: 教科書読んで黒板に書いてるだけとかさ, そっちの方がありがたいんだけど, でも面白く

男2: はないよね, いい授業ではないよね.

男1: _____ まあ, そうだよな.

(J2)

(5)において、参加者は授業と講義の区別について話し合っている。まず女2は講義で、教師がどのように授業をするのかについて言おうとしていると考えられる。しかし、彼女の発話の途中で、男2は「先生によるけどね。」と発話し、自分の意見を述べ始める。その次の男1の「うん」という相づちは、男2の発話を聞いていることを表明している。これによって、男2が話し手の役割を他の参加者から承認されたことになり、男2が女2からターンを奪取したことの証明となる。そこで、男2は次の話し手として自分の発話を続けることになる。

5-2-2. ターン取得失敗

「ターン取得失敗」とは、話し手以外の参加者が割り込み発話によって発話権を取ろうとするが、現在の話し手が発話権を譲らないため、その割り込んだ参加者が発話を途中で止め、ターン取得が失敗に終わることである。以下のように図示できる。

話し手 A: _____ |

話し手 B: _____

(6)

男2: 还有周志诚¹老师那个课 [也比较好], 我觉得. 那个说, 说了一长, 一长段, 特别刺激.

女2: _____ [但是他后面]

¹ 会話資料中の名前はすべて仮名である。

(C4)

(6 日本語訳)

男2:あと, 周志誠先生の授業 [もいいよね]. 長い, 長い文を読んで (翻訳させられて), すご

女2: [でも, 後では]

男2: く緊張感がある.

(6)では男2がある教師の授業がいいと意見を述べている途中で, 女2は反対の意見を持っているようで, 「でも, 後では」という発話で現在の男2の発話に割り込もうとしている. しかし, 男2が発話権を譲らず, 最後まで自分の発話を完成させたので, 女2は発話権の取得に失敗した. また, ターンの定義によって, 「ターン取得失敗」の発話も, 一つのターンと認められる.

5-2-3. ターン並列

「ターン並列」とは, 現在の話し手のターンが終わらないうちに, 他の参加者がそのターンに割り込んで話す, 割り込まれた方も, 割り込んだ方も発話を中止せずに, 即ち, 自分のターンを諦めずに, 自分の発話を完成させるまで同時に話し続けることである. 言い換えれば, 両者とも同時発話を意識しているにもかかわらず, 敢えて自分の発話を続けている場合である. ただし, この同時という概念は, 必ずしも物理的な同時とは限らず, 以下の例のように一定の時間内でのターンの並存であることを断っておきたい. 図示すると以下のようなになる.

話し手A: _____ ———— |

話し手B: _____ ———— |

(7)

男2: 尤其是课上如果跟老师之间互相, 跟老师提问, 可以促进交流, 这样, 锻炼自己的口

女1: 就是.

男2: 语啊, 各方面能力, 而且, 而且我觉得跟川本老师交流得特别少, 上课就是光川本老师一个

男2: 人 [在那儿讲,] 课下又没有 [时间跟老师交流,] 他 [课上应该,] 啊, 多

女1: [是, 光那个]

女2: [他提问的时候,] [他提问了后面] 也没人回答.

男2: 一些提问.

男1: 他不需要你回答.

(C4)

(7 日本語訳)

男2: 特に授業中先生と質問とかを交わして, コミュニケーションもできるし, 日本語

女1: そう.

男2: の練習にもなる. でも, 川本先生の授業では交流ができないっていうか, 殆ど川本先生

男2：一人で[喋ってて、] 授業外でもあんまり先生と話をする [チャンスがない.]

女1： [そう、先生一人で]

女2： [先生が質問をする時は]

男2：だから、[授業中はできるだけ] あ、多くの質問をした方が

女2： [質問をしても] 答えてくれる学生がいないよ。

男2：いいと思う。

男1： 実は先生も答えてもらおうとはしてないと思うよ。

(7)では、まず男2が話し手として話し始める。その途中で、女1が聞き手として「そう」と相づちを打ち、男2は話し続けている。「川本先生が一人でしゃべり続ける」という発話を受け取り、今度は聞き手の女1がまず「そう」という相づちを打ち、その発話を繰り返そうとするが、男2が話し続けているため、途中で諦めている。そして、話し手の男2の「先生と話し合うチャンスがない」という発話の途中、女2は「先生が質問をする時は」という発話で、男2の発話に割り込もうとしている。しかし、男2はターンを譲らず、話を続けている。一方、女2も諦めないで、また男2の発話に割り込んで、自分の発話を完結させている。その後、男2も自分の話を終了させた。その次の男1の「実は先生も答えてもらおうとはしてないと思うよ。」という発話は、明らかに女2の発話に対する反応であり、女2も話し手の役割を果たしていることの証明と見ることができる。

男2と女2のそれぞれの発話から見れば、両方とも相手の話に割り込んだり、相手に割り込まれたりしながら、自分の発話を最後まで続けていることが分かる。男2と女2の発話は統語的なひとまとまりで、時間的には同時に並存しているので、本研究では「ターン並列」と呼ぶ。

小集団討論においては、参加者が四人いるので、話し手にとっては、潜在的な聞き手は一人とは限らない。そのため、全員でなくて、その中の一人でも自分の話を聞いてくれれば、話し手として発話を最後まで話し続けられると考えられる。これが、「ターンの並列」が小集団討論に見られる原因であると考えられる。

更にその発話の内容からすれば、(7)のように異なった意見を持っているため、同時に相手の意見に反対し、自分の主張を強調するものもあれば、次の(8)のように同じ内容について、争って情報を提供したり、感想を述べたりするものもある。

(8)

女2：我以前听过一个时政课嘛，那个老师就是谈时政，一边谈一边说的一些话特别搞笑。然后

女2：你听着也觉得听下来挺不错的。 哦。

男2： 那电视不是[爱在哈佛]那个电视嘛。 那个好像仿着他

女1： [时政课.]

男2：们上课上得。

女1： 那个老师其实上课也很枯燥，就是那个老头，什么比，比尔教授。 他讲的

男1： 嗯。

女1： 一些内容其实很枯燥，就是他有的时候用的一些就是感觉比较有趣的话，一下子就把他给，

女1： 也不是说有趣的话，反正这个 给人[感觉]

男2： 也就是 他总是 [他] 从来都是，就是他自己写的教课书，

女1： 啊，对，对，对。他有[自己的思想.]

男2： [他有自己的] 观点在里头。并且是还提问，提问出并且把你驳倒，

男2： 让你再把他驳倒。

女1： 就是。

(C9)

(8 日本語訳)

女2： 前はある先生の政治学についての授業を取ったことがあって、あの先生はいつも政治のこ

女2： とを言いながら、他の面白いこともいろいろ喋ってたの。あの授業も面白いなと思う。

女2： ああ。

男2： あれよ。[「ラブストーリーインハーバード」] っていうドラマあるじゃない。 あ

女1： [政治学の授業]

男2： の先生をまねるんじゃない。

女1： あの先生の授業もつまらないよ。あの、ビルっていう教授。

女1： 彼の授業の内容はつまらないけど、なんか、ただ面白い言い方で言っているんで、

男1： うん。

女1： こう、 いや、面白いっていうか、まあ、 なん[か、]

男2： つまり、 彼はいつも、 [いつも] 自分で教科

男2： 書を作って、 [自分の考え方を] 書いてる。しかもいつも質問

女1： あ、そうそうそう。自分[の考え方を]持つてる。]

男2： をして、学生と議論している。

女1： そう。

分析する際に、ターンの数はターン並列を作り上げた話し手の人数によって決定する。例えば、(7)では男2と女2のすべての発話は、ターン数として2と数える。

ところで、日本語のデータにはこのような「ターン並列」という現象は見当たらなかった。

5-2-4. ターン挿入

ターン挿入とは、今の話し手のターンが終了するとは思われない時点で、他の参加者が実質的な短い発話でターンを挿入し、同時に、今の話し手が自分のターンを続け、あるいは、一旦ポー

ズを置いてから、自分のターンを最後まで完結させることである。以下のように図示できる。

話し手 A: ————— |

話し手 B: ——— |

(9)

男1: 大学って自由すぎるんですよ。 [高校]みたいに[こう] 目標もない

女1: うん。[確かに.]

男2: [目標] がないもんね。

男1: し、多少押さえつけがあってもいい授業ができると思う。

男2: ああ。

(J10)

(9)では、男1が話している途中で、男2が話し手の男1の発話を聞き、その内容を予測して、「目標がないもんね」と短いターンを挿入し、会話内容の展開に寄与している。その後、男1が引き続き、自分のターンを終了させる。このような割り込み発話を生駒（1996）は一時的なターンを取る「副次的ターン」と捉えている。

本研究で収集したデータでは、「ターン挿入」の内容は、今の話し手の発話に基づいて予測したり、あるいは、話し手の発話に関する新しい情報を加えたりするような発話があった。量的分析を行う際には、挿入されるターンと今の話し手のターンをそれぞれ一つのターンと数える。

5-3. 他者選択

他者選択とは、上に述べた通り、現在の話し手自身が次の話し手を選択した場合、現在の話し手は話すのを止め、選ばれた参加者が続いて話すことである。これによってターンは移行し、話者が交替する。その具体的な形式は、次の話し手を指名することによって発話を促すか、問い掛けて答えを求めるかによって、以下の二種類に分けることができる。

5-3-1. 発話勧誘

(10)

女1: いい授業ね、どうよ。一年生、一、一年、もう、後期入ってたけど。授業の感想は？高校

女1: と違って、なんか変わった？

男2: 受身じゃない。 講義だったら、受身な感じがするんだけど。

女1: 受身じゃない。 うん。

女2: へえ。

男2: やっぱり自分でなんかして、自分の好きなこと調べて勉強して、自分のやりたいように

男2: やってっていう形で、授業じゃないですか。 そういうのが多くなったんで、

女2： うん。

女1：ああ、そうなんじゃ。ええ、ニイくんは。

男1：そうですね。やっぱ、高校の時と比べると、注意されることとかってというのは、少なく

男1：なってるっていうか。

(J9)

(10)は討論の始まったばかりのところで、女1はまず発話権を取り、他の参加者の意見を聞いている。その後、男2は自ら発話権を取り、自分の意見を述べ始めている。その途中で、聞き手としての女1と女2は現在の話し手の男2の発話を繰り返したり、相槌を打ったりして、その話を聞いていることを表明している。そして、女1は男2の発話に対し、相槌を打ってから、今まで話していなかった男1を指名して、ターンを譲っている。それで、女1は話すことを止め、選択された男1は発話権を持つようになり、自分の新しいターンを始めている。

(11)

男2：じゃ、エミさんの意見も聞いとけばいいんじゃないの。

全員： [笑う]

女1： あ、そうだそうだ。大切だ。

男2：もう言っちゃいな。

女2： 私としてはやっぱり生徒と先生間の交流も大事だと思うけど、(略)

(J2)

(11)は、討論が開始して、1/4のところの会話である。それまでは女2は他の参加者の意見を聞いていたが、自分の意見はまだ出していない。そこで、男2は「エミさんの意見も聞いとけばいいんじゃないの。」と言って、発話権を女2に譲っている。参加者達も女2の意見を聞いていないということを意識し、その次の笑いもその証明であると思われる。

5-3-2. 質 疑

質疑とは、話し手が今までの討論内容について質問したり、特定の参加者に質問に答えてもらったりすることを指す。

(12)

男2：すごいがつつり、何じゃろうって思って、書いて出して、次の時間で、すごい楽しみに

男2：待とったら、ああ、終わった。

女2： [笑う] え、それで聞きに行ったりとかするの。

男2：なんて言うんですか。そこまでいったら、なんか、そこまでして聞くのもなってい

女2： うん。

男2：うのもありますし。(略)

(J9)

(12)では、男2は教師に分からないところがあるかどうかと聞かれたので、質問を紙に書いて出したという自分の経験を話している。その後、女2は男2に対して、その時のことについて具体的に問いかけている。従って、次に男2はまた話し手に回り、話し始めている。

男1：我当时是我和李建飞一起去，一节课都没有落过。别看是选修，比咱必修课去的都多。

女1：你觉得他的特别之处在哪儿嘛。

男1： 嗯，和台下，就是和咱坐，下面坐的交流特别多。

(C9)

(13 日本語訳)

男1：私達は李健飛さんと一緒に行ったんで、欠かさず全部出たの。選択科目というのに、

男1：必修よりも人が多い。 うん、学生との交流が多いね。

女1： その授業って、どこが特別なの。

(13)では、男1はある選択科目の授業は人気があり、自分も出ていたと話している。しかし、他の参加者は出ていないので、詳しくは分からないようである。そして、女1は他者選択で「その授業って、どこが特別なの。」と男1に対して質問をし、その授業について詳しく聞いている。そこで、男1はまた話し手になり、その授業について語り始めている。

6. 話者交替の日中対照

上述した小集団討論における話者交替システムに基づき、日中両言語の各ターン数及び、各々のターン数がそれぞれの総ターン数に占める比率を表1に示す。

表1 各ターン数の総ターン数に占める比率の日中対照

	総ターン数 (%)	自 己 選 択						他 者 選 択	
		TRPである場合		TRPでない場合					
		一人発話 (%)	同時発話 (%)	ターン 奪 取 (%)	ターン 取得失敗 (%)	ターン 並 列 (%)	ターン 挿 入 (%)	発話勧誘 (%)	質 疑 (%)
中国語	841 (100)	559 (66.5)		261 (31.0)				21 (2.5)	
		531 (63.1)	28 (3.3)	119 (14.1)	37 (4.4)	47 (5.6)	58 (6.9)	5 (0.6)	16 (1.9)
日本語	580 (100)	438 (75.5)		99 (17.1)				43 (7.4)	
		428 (73.8)	10 (1.7)	39 (6.7)	2 (0.3)	0 (0)	58 (10)	30 (5.2)	13 (2.2)

本研究におけるターンの定義により、表1の総ターン数は話し手のターン数に当たる。表1から以下のようなことが分かる。

日中いずれの言語においても、TRPである場合のターン数が総ターン数の六割以上を占めている。TRPでない場合のターン数、いわゆる割り込み発話はより少なく、中国語データの方は三割を超えるのに対して、日本語データの方は二割に満たず、中国語データの約半分であることが分かる。他者選択については、両方とも比率が非常に低く、中国語データの方は2.5%であり、日本語データの方は7.4%である。次には、日中両言語における差異の大きいTRPでない場合と他者選択について分析していきたい。

6-1. TRPでない場合の日中対照

まず、表1から分かるように、TRPでない場合のターン数の比率から見れば、日本人より、中国人の方が割り込み発話を多用している傾向にあると言えよう。また、その下位分類として、「ターン奪取」「ターン取得失敗」「ターン並列」と「ターン挿入」の四種類の全てが中国語データに出現している。それに対して、日本語データでは、三種類しかなく、「ターン並列」は一例もなかった。

ターン並列の定義から分かるように、それは現在の話し手とその途中で割り込んだ話し手が、その発話の重なりに気がついて、誰も譲らずに、最後まで話を終了させることである。よって、本研究のデータから見れば、日本語母語話者の方は、割り込みによる音声の重なりはあるが、「ターン並列」のような長い時間での重なりを避けているように思われる。その原因として、日本語母語話者は、実質的な発話をする際に、できるだけ一人ずつ話すようにし、参加者が話し手としての発話権を尊重しているからではないかと考えられる。中国語データでも「ターン並列」の使用率はそれほど高くないが、多少見られる。即ち、中国語母語話者にとっても、それは一般的な話し方ではないが、どうしても言いたいことがあれば、他の参加者の発話とずっと重なっても、最後まで言うということになる。従って、日本語母語話者に比べ、中国語母語話者は礼儀を重視していないとは一概に言えないが、「ターン並列」が起こった際、礼儀より自分の発話する権利を重んじると考えられる。

更に、TRPでない場合の四種類の下位分類について、割り込み発話における出現率の差異を示すため、以下の図2及び図3のように円グラフとした。

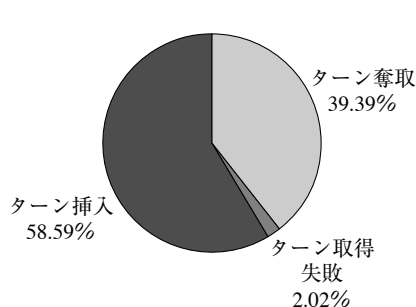


図2 TRPでない場合における各下位分類の占める比率（日本語データ）

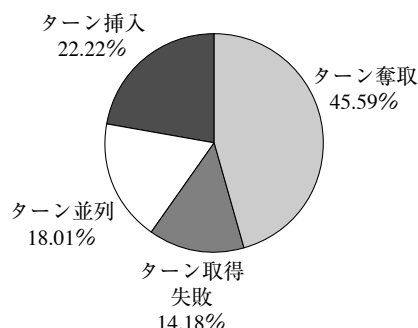


図3 TRPでない場合における各下位分類の占める比率（中国語データ）

日本語データでは、「ターン並列」はなく、また、「ターン取得失敗」の比率も非常に低いことが見られる。表1から分かるように、中国語データの4.4%に対して、日本語データの方は0.3%しかない。「ターン並列」と「ターン取得失敗」というのは、他の参加者に割り込まれても、今の話し手が発話権を諦めないことである。図2及び図3の割り込み発話における比率上の差異から考えれば、中国語データで、およそ1/3の場合は、「ターン並列」と「ターン取得失敗」であり、それは、他の参加者がターンを取ろうとするが、今の話し手が発話権を譲らずに話し続けることである。一方、日本語母語話者の方は2%あまりで、他の参加者に割り込まれると、今の話し手が自分の発話権を譲りやすい傾向にあると思われる。

更に、日本語データでは「ターン挿入」が一番多く使われ、中国語データの方の比率を上回っていると見られる。上に述べたように、「ターン挿入」の内容については、主に、今の話し手の発話に関する予測や関連情報の提供であり、生駒（1996）の「副次的ターン」に相当する。生駒（1996）は、「副次的ターン」は、「主となるターンの話し手をバックアップし」また、「情報を付け足したり、より多くの情報を要求することによって、話の展開により発展がみられる」と述べている。よって、本研究の分析の結果からすれば、日本語母語話者の方が今の話し手の発話を聞きながら、予測したり、それに関連する情報を提供したりするような短い発話をより多く用い、そうすることにより、話し手の発話をよく聞いて理解していることを積極的に表し、話し手のターンの展開を助ける傾向にあると考えられる。

6-2. 他者選択の日中対照

他者選択については、中国語データでは2.5%に過ぎない。それに対して、日本語データでは7.4%を占めている。従って、中国語データより、日本語データの方がやや高い比率でありながら、両言語とも、他者選択による話者交替は少ないと言えよう。

更に、その内訳を分析してみると、中国語データの方は、話し手の内容に関して質問をする

「質疑」が「発話勧誘」より多く使用されることが分かった。それに対して、日本語データの方は、他の参加者の名前を呼んだり、発話するように誘ったりするような「発話勧誘」が「質疑」より高い比率で用いられている。従って、例(13)のように、中国語母語話者は討論の内容に関心を持ち、もっと詳しく知りたいことや分からない点があると相手に説明してもらうために、他者選択を多く使用すると考えられる。一方、日本語母語話者は、例(10)と(11)のように、他の参加者の発言が先に存在する「質疑」よりも、先に（少なくとも直前に）意見表明の発言が存在しない参加者に対する「発話勧誘」が多い。よって、中国語母語話者の方は参加者の発話内容に焦点を当てる「内容重視型」であるのに対し、日本語母語話者の方は参加者全員の意見を表明する発話を確保しようとしているように見えるため、「人間関係重視型」と推測できる。

7. 終わりに

本稿では、小集団討論場面における話者交替を把握するために、小集団討論における話者交替システムを提示した。また、日中両言語における相違を明確にするために、その話者交替システムに基づいて対照研究を行った。その結果は以下のようにまとめられる。

- (1) 役割から参加者を話し手と聞き手に分類し、「話し手」と話者交替の「話者」を統一させることによって、先行研究で見られたターンの定義と実際の考察内容の不一致という問題を解決できた。
- (2) 会話資料の分析を通じ、Sacks et al.(1974) が言及していない TRP でない場合における話者交替についても記述し、日本語・中国語による小集団討論の話者交替の実態を扱える話者交替システムを提示した。
- (3) 「ターン並列」を提示した。本研究の小集団討論では、参加者が四人いるので、話し手にとっては、潜在的な聞き手は1人とは限らない。そのため、全員ではなくて、一人でも自分の話を聞いてくれれば、話し手として発話を話し続けることができると考えられる。それが「ターンの並列」が小集団討論に生じる原因であると考えられる。その使用率は低く、しかも中国語データにしか見当たらなかった。従って、日本語母語話者に比べて、中国語母語話者は礼儀を重視していないとは一概に言えないが、「ターン並列」が起こった際、礼儀より自分の発話する権利を重んじるように考えられる。
- (4) TRP ではない場合において、割り込み発話の使用率からすると、中国語データの方は、日本語データのほぼ2倍になっている。中国語母語話者がより割り込み発話を多用することが分かった。更に、日本語データには、「ターン並列」は見当たらないだけでなく、「ターン取得失敗」も非常に少ないことから、割り込まれると、ターンを譲りやすい傾向にあると考えられる。中国母語話者はそれほど簡単にターンを譲らず、即ち、他の参加者の話し

手として話す権利より自分のその権利を重んじると考えられる。その上、「ターン挿入」の多用から分かるように、日本語母語話者は、話し手が話している途中、短いターンを挿入することによって、話し手の話を予測したり、関連する情報を提供したりするのである。それは話し手のターンを奪うというより、話し手に協力していると考えられる。

- (5) 他者選択の言語形式からみれば、中国語母語話者の方は参加者の発話内容に焦点を当てる「内容重視型」であるのに対し、日本語母語話者は参加者全員の意見を表明する発話を確保しようとしているように見えるため、「人間関係重視型」と推測できる。

今回の研究を通じて、中国語母語話者と日本語母語話者の小集団討論における話者交替システムの相違が明らかになった。外国語を使用する際には、母語が影響を与えることも考えられるため、日中両言語の割り込み発話による自己選択や、他者選択の使用の差異が接触場面で現れ、円滑なコミュニケーションに支障を来す恐れがある。従って、学習者にそれらの相違点を意識してコミュニケーションを行うように提言する必要があるのではないと思われる。とくに、中国人日本語学習者に対しては、日本語母語話者とスムーズなコミュニケーションを達成するためには、割り込み発話の使用などの研究成果を外国語教育に導入すれば良いのではないと思われる。例えば、相手の発話を聞きながら、「ターン挿入」という形で、その先の内容を予測したり、関連する情報を加えたりすることは、相手の話に関心を持つことを表明し、会話をスムーズに展開するために有効な戦略と言える。一方、「ターン並列」のように長い時間同時に発話することや、相手と争って発話権を奪うことをできるだけ避けるように指導する必要があると考えられる。

今回の調査資料ではデータの量も限られており、その上、話者交替の方法は、同一言語の話者であっても個人差が見られる可能性があるため、今後は更に用例を増やし、今回見られた結果を追検証していく必要がある。

なお、小集団討論における割り込み発話の役割は、会話の進行にとってプラスなのかマイナスなのか、参加者はどのように捉えるのかを明らかにするため、その発話の内容と関連づけて、更に考察する余地がある。

謝 辞

本論文は中国西安交通大学の指導教官であった趙剛教授の指導の下で行われた修士論文の一部であります。本論文をまとめるにあたって、趙剛教授の長期にわたる指導と励ましに心より深謝いたします。また、本研究に対する有益なご助言や励ましをいただいた現在の指導教員井上奈良彦先生、データ収集にご協力いただいた信州大学の徳井厚子先生、論文を添削していただいた小出湧三先生に厚くお礼申し上げます。最後に、貴重なコメントをいただいた査読委員及び中国語と日本語の会話資料の収集に快くご協力いただいた方々に感謝いたします。

参 考 文 献

- 生駒幸子 (1996) 「日常会話における発話の重なる機能」『世界の日本語教育』6, 国際交流基金日本語国際センター, 185-199.
- 石崎雅人・伝 康晴 (2001) 『談話と対話』, 東京大学出版会
- 稲垣陽子 (2000) 「会話における割り込みの機能と男女差」『日本研究教育年報』04, 25-47.
- 金 志宣 (2000) 「turn および turn-taking のカテゴリー化の試み——韓・日の対照分析——」『日本語教育』105, 日本語教育学会, 81-90.
- (2001) 「turn-taking パターン及びその連鎖パターン——韓・日の対照会話分析——」『人間文化論叢』第4巻, お茶の水女子大学大学院人間文化研究科, 153-165.
- 久米昭元・徳井厚子・徐 一平 (2000) 「コミュニケーション様式の日米中比較研究——小集団討論の質的分析を通して——」『平成11年度COE形成基礎研究費研究成果報告(4)』
- 木暮律子 (2002a) 「母語場面と接触場面の会話における話者交替——話者交替をめぐる概念の整理と発話権の取得——」『言葉と文化』, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻, 163-180.
- (2002b) 「話者交替における発話の重なり——母語場面と接触場面の会話について——」『日本語科学』11, 国立国語研究所, 115-134.
- 小室郁子 (1995) 「“Discussion”におけるturn-taking——実態の把握と指導の重要性——」『日本語教育』85, 日本語教育学会, 53-65.
- 佐久間まゆみ他 (1997) 『文章・談話の仕組み』, おうふう出版
- ザトラウスキー, ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析』, くろしお出版
- 杉戸清樹 (1987) 「発話のうけつぎ」『談話行動の諸相——座談資料の分析——』国立国語研究所報告書92, 三省堂, 68-106.
- 西野容子 (1993) 「会話分析について——ディスコースマーカーを中心として——」『日本語学』5月号, 明治書院, 89-96.
- 橋内 武 (1999) 『ディスコース』, くろしお出版
- 初鹿野阿れ (1998) 「発話ターン交代のテクニック——相手の発話中に自発的にターンを始める場合——」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』, 東京外国語大学, 147-162.
- 深澤のぞみ (1997) 「会話への積極関与としての割り込み発話——異文化間コミュニケーションの会話分析——」『社会環境研究』2, 金沢大学大学院社会環境科学研究科, 131-139.
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』, くろしお出版
- メイナード, 泉子・K. (1993) 『会話分析』, くろしお出版
- 森 純子 (2004) 「第二言語習得研究における会話分析: Conversation Analysis (CA) の基本原則, 可能性, 限界の考察」『第二言語としての日本語の習得研究』7号, 第二言語習得研究会, 186-213.
- 李 麗燕 (1999) 「日本語母語話者の雑談における「物語の開始」——発話順番のやり取りとの関係を中心に——」『世界の日本語教育』9, 国際交流基金日本語国際センター, 221-239.
- (2000) 『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究——会話管理の観点から』, くろしお出版
- Button, G. 1990. On Varieties of Closings. *Interaction Competence*. G. Psathas. Maryland, University Press of America: 93-148.
- Edelsky, C. 1981. Who's got the floor? . *Language in Society* 10: 383-421.
- Levinson, S. 1983. *Pragmatics*, Cambridge University Press.
- Sacks, H., Schegloff, E.A. & Jefferson, G. 1974. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation, *Language* 50: 696-735.
- 刘 虹 (2004) 『会话结构分析』, 北京大学出版社
- 赵 刚 (2006) 「受话者言语行为的日汉对比研究」『日语研究』2006年第4期, 商务印书馆